

目次

はじめに ..... 2

第一章 一九四五年、広島・長崎へ ..... 9

第二章 写真展への道のり ..... 57

Photo Album 焼け跡の隣人 ..... 87

第三章 活動への圧力と新展開 ..... 109

第四章 夫婦として、同志として ..... 145

第五章 別離、そして再会への希望 ..... 165

あとがき ..... 188

※ ジョー・オダネルによる終戦直後の写真は、1945年8月から1946年3月までの期間に撮影。

佐世保の市街地  
佐世保で最も高い12階建てのビルから撮影。ビルは市庁舎のようで、不思議なことにほとんど戦災による被害を受けていなかった。一方、街は焼夷弾によって破壊しつくされていた。

## はじめに

人との出会いというのは本当に不思議で、これこそ自分の力ではどうにもならないと感じざるを得ません。生まれてからこの時までさまざまな出会いがあり、それが今の私を形成していると言っても過言ではないでしょう。人は一人で生まれてきて、この世を去る時もまた一人です。しかし、この地球上で息をしている間は、人間は人との関わり合いを抜きにしては生きていくことができません。その出会いを左右しているのは、私たちのすべてを知っておられる神以外にないと私は思います。

私の夫であるジョー・オダネルは、一九四五年、アメリカ海兵隊の従軍カメラマンとして終戦直後の日本に派遣されました。そこで広島・長崎をはじめ各地を巡り、廃墟となった街々や日本人の暮らしぶりを撮影しました。基本的に公務で撮影された写真はすべて軍に回収されましたが、私用のカメラで個人的に撮影したものが手元に残され、それらの写真を用いて一九八九年から二〇〇七年に亡くなるまで、反戦・反核活動に従事していました。日本でも、彼の撮った「焼き場に立つ少年」の写真が教科書に掲載されるなどしましたので、こ

存じの方もおられるかもしれません。

私たちは一九九三年の年末に出会いました。クリスチャンである私は、当時、日本基督教団・若松栄町教会（福島県会津若松市）に所属していました。若松栄町教会は常々平和活動に力を入れており、多くの関連イベントを企画し、社会の人々とのつながりを大切にしていました。その活動の一環として、ジョーの写真展が開かれたのです。教会の信徒であった私の中にも自然と平和を強く望む気持ちが芽生えており、ジョーの撮った写真を通して、原爆投下後の悲惨な状況だけでなく、被害に遭った人々がどのような思いをもって立ち直ろうとしていたのかを学びました。それまで私が見ていた広島と長崎は教科書の中だけのもので、たまにテレビで特集などを組んでいるものを見たりはしましたが、被爆者の人々と私の間にはある程度の距離があったように思います。一九四五年の出来事というのは、はるかかなたのものであって、その悲惨さは頭では理解できるものの、実際にその痛みを共感するまでには至っていませんでした。それが、ジョーの写真展を間近で見、講演をこの耳で聞いたことによつて、その当時の常識をはるかに超えた惨状に直面した人々、私たちとそんなに変わらない一般の男性、女性、子ども、老人の心の叫びが聞こえたような、自分の現実とその人々の過去の人生が重なり合ったような、そんな衝撃を受けたのです。海兵隊のカメラマンとして、自国

のために何の疑いもなく日本に上陸した一人の若者の心の軌跡は、聞く者の心に深く入り込み、戦争の無残さ、原爆の恐ろしさを改めて感じさせました。

そして、アメリカ人でありながら「原爆投下は間違いであった」と公言するジョーの言動に深い感動を覚え、国や住む場所は違っても、同じ目的に向かって進むことはできるのだという希望をもったことを覚えています。私には平和な未来を強く願う彼の姿勢は理解できませんでしたし、戦争を知らない世代の私たちにも必ずできることはあるはずだ、との確信に似たものを心に抱きました。つまり、スタート地点から私たちは共に闘う同志であり、同じ方向を向いて歩き始めていたのです。彼との出会いによって、私の中にあつた平和への歩みはますます大きな意味をもち、クリスチャンとして、また社会に属する一人の人間として何をすべきなのか明確になったといっても過言ではありません。そのような二人の歩みですから、たまには道を外れそうになりながらも、同じゴールに向かって歩き続けることができたのではないのでしょうか。

ジョーは、核戦争はホロコーストと同じほど罪深いものだと、平和な未来のためには二度と起きてはならないと言いつつ残り残して人生を終えました。愛する母国の人々に、過去に起きた出来事を伝え、よりよい未来を築いていける動力の一つとして、彼の写真展が用いられる

ことが私の祈りでもあります。そしてそれは、神が強く望んでおられることであるとの確信をもって、これからの歩みを続けていくつもりです。彼が長崎原爆の日である八月九日に召されたということ、そのこと以上に明確な神の啓示があるのでしょうか。

私は、年齢もこともばも生活環境さえまったく違うジョー・オダネルという人間に巡り会ったのは、すべて神の采配であつたと信じています。共に同じ目標に向かって歩んだ十四年間、そこに神の助けが常に与えられていたからこそ、深いレベルでの魂のつながりが可能であり、すべてを乗り越えることができたのです。祝福にあふれた、恵まれた人生を与えてくださった神に、感謝ということばでは表せないほどの満たされた気持ちでいっぱいです。そして、その思いを胸に抱きながら、これからも前を見て、時には上を見上げながら、つたない歩みを続けていきたいとの思いを新たにしています。